

G.M. ホプキンスの詩の世界 (2)

—感覚と信条—

宇佐美道雄
 外国語教室
 (1977年9月9日受理)

The Poetical Realm of G.M. Hopkins

—Sensibility and Creed—

Michio USAMI

Department of Foreign Languages

(Received September 9, 1977)

The point discussed in the paper is that G.M. Hopkins' poems had been written from his inner tension between sensibility and creed. Repulsion and conciliation between the two are traced in Hopkins' works throughout his life. The author thinks that, though Hopkins had been always an infallible Jesuit, the desire inside him to attain infinitesimal, earthly, sensuous self on the one hand and cosmic, celestial, dogmatic faith on the other is originated deep into the opulent perception bestowed upon him.

G.M. ホプキンスの詩が読者に与える衝撃のみならず、詩人の知覚の天性の非凡にある。個体の感官は外からの絶え間ない刺激に無数の反応を生み、知覚の総体が彼の地上界を作り上げる。こうしてそこでの経験の継続が個人の感情や思想をはぐくむ。ホプキンスの豊饒な知覚は作品の中に深く鋭い感覚の世界を拓けさせたが、その一方では感覚に溺れることを許さない峻厳な思惟の世界もまた開かせた。烈しい感情の流れを峻しい信仰の高みへと鍛え上げるホプキンスの力は、偏りを持たない詩人の知覚そのものに根ざした。溢れる感覚のないところに求道はあり得ない。感性のほとぼしりに身をまかせる一方で、ホプキンスはそれを越える永続的な悟性の充足を必死に求めた。

ホプキンスの初期の詩の中では自然は個性的な美に満ち、それらが感能への傾きを伴ってあざやかに描かれた。しかし最も早い時期の作品にも自然美へ向う感性への不安はすでに表わされており、美は消滅を予見するはかないものとして意識された。光と音は感覚の主要な部分を占めるが、ホプキンスの作品にあらわれる忘れ難い日光はすべて夕暮れのそれであり、耳にひびく風の音は、例

えば *The Escorial* 第13聯の “Then pass'd the wind, and sobb'd with mountain-echo'd woe.” (さらに弱くやがて風は過ぎ行き、山にこだまする悲しみですすり泣く。) あるいは *Winter with the Gulf Stream* 第2聯の “The hoarse leaves crawl on hissing ground/ Because the sighing wind is low.” (声のかすれた葉が地をひそかな音をたてて匍う。吐息する風のそよぐために。) のような移ろうものを言葉にとどめる試みであった。

引用の前者はホプキンスが16歳のときにグラマースクールで書いたといわれる現存する最初の作品からであり、後者は大学に入学した19歳の年に書かれたものからである。習作期にあっては、自然の奥に予感される衰え——万物の底にほのみえる必滅の相貌が、詩人の美感をひときわ引き立てるのに役立ったけれども、その故にこそ、感覚への不安とそれを危険と見る傾向は次第に強まりオクスフォードでの学究生活を通してようやく明確な形をとった。

ホプキンスの感受性は地上のすべてに向けて豊かに感応したが、ただどんな小さな対象にも、おもてに表われ

た特徴のみに安んじることができなくて、いつも個性の奥底へ向けてその感知力が働いた。感覚のみなもとに万物存在の起点ともいべきホプキンスの知覚が精妙に躍動しつづけたからに違いないが、感覚が安定を求めてどれほど根源にさかのぼろうとも、知覚がみずからを知覚し得ない限りは、いつか最後を越えて無限の空虚に抜けるほかはない。情意の不定が信条の堅牢を望み、信条の不滅が情意の流露にゆらぐという果てしない背反は、詩人の生得の知覚力に孕まれる宿命であったが、接点を求めて根の奥まで追って止まない力が、無限——神と向いあうことになるのもまた抗し得ぬ必然であった。ただ、こうしたわけで、ホプキンスの宗教は生涯を通してあくまで個人的、求心的であって、集団へ向う広さに欠けた。ホプキンスの詩の中で、恐ろしいほどの集中力をこめて神と面するのは、いつも「わたし」であって「われわれ」ではなかった。

ホプキンスが終生懐しく思い出したオクスフォードでは若い詩人は俊才のほまれ高く、古今の知識に触れて深い影響を受けたが、湧いてこぼれる感覚への不安と恐れを克服して永遠につながる安定に達したいとする根本の命題には、当然ながら解決をみることがなかった。在学中に作られ、ホプキンスの初期の作品の中ではよく読まれる *Heaven-Haven* が当時のホプキンスの心境をかいま見させる。

I have desired to go
Where spring not fail,
To fields where flies no sharp and sided hail
And a few lilies blow.

And I have asked to be
Where no storms come,
Where the green swell is in the havens dumb,
And out of the swing of the sea.

(泉のかれないところ、鋭い横なぐりのあられの吹かぬ、ゆりの花咲く野辺へ行きたいと望んだ。

嵐の来ないところ、大波にゆられぬ、緑のうねりが港内で静まる場所にいたいと願った。)

ラファエル前派の絵画を思わせる小品の中にホプキンスの詩才がきらめく。第1聯3行の“sided hail”には読むものの心象にくい込む力がある。第2聯4行にあらわれる弱弱強格へのリズムの変化は“swing”, “sea”の頭韻の働きを得て、外海の大きな動揺を身体に呼び覚ます。これらの詩句が詩人の内面の葛藤をうかがわせる一方で、静かな安らぎを得たいという願いが全体を覆う。

学生時代のホプキンスが残した断片的な日記に見える次の一節はいつも人目を惹く。“For Lent. No puddings on Sundays. No tea except if to keep me awake and then without sugar. Meat only once a day. No verses in Passion week or on Fridays. No lunch or meat on Fridays. Not to sit in armchair except can work in no other way. Ash Wednesday and Good Friday bread and water.” (四旬節に。日曜日はプディングなし。眠らないためのほかは茶を飲まない。それも砂糖なし。肉は日に一度。受難週と残りの金曜日には詩を手にししない。金曜日は昼食抜き。仕事の必要以外はひじかけ椅子に坐らない。聖灰水曜日と苦受日はパンと水。) この時期ホプキンスは罪深いおのれを罰するかのようになり、禁慾に魂の救いを求めた。肉を痛めることが靈の輝きを増すとでもいわぬばかりに苦行に喜びを見ることもあった。1865年の *Easter Communion* と題するソネットは「復活祭聖さん式」のめでたさを歌う。

Pure fasted faces draw unto this feast:
God comes all sweetness to your Lenten lips.
You striped in secret with breath-taking whips,
Those crookèd rough-scored chequers may be pieced
To crosses meant for Jesu's;
.....
Your scarce-sheathed bones are weary of being bent;
Lo, God shall strengthen all the feeble knees.

(清らかな断食をすませた顔がこの宴席につどう。神はあなたがた四旬節を終えた唇にこの上ない美味を与え給う。息をのむ鞭打てあなたがたにはひそかな痕がついているが、その曲った格子模様のあらい痕は、継ぎ合わせてキリストをあらわす十字架となるかも知れない。……あなたがたの露わに近い骨からは、かがむ力も失せた。でも見よ、神は弱った膝にすべて力を与え給う。)

しかし単なる禁慾が現世の美醜、愛憎を消して、内面の平静をいつまでも許すことはあり得ない。かえってそれらをむき出しにすることもあったに相違ない。ホプキンスは汚れない学友たちに比して自分の罪深さを呪い、この年の無題のソネットでは次のように書いた。

Myself unholy, from myself unholy
To the sweet living of my friends I look——
Eye-greeting doves bright-counter to the rook,
Fresh brooks to saltsand-teasing waters shoaly: ——
(不浄な自分を不浄な自分から友人たちの楽しげな暮

しへと見くらべる。——みやまがらすとは打って変ったやさしいまなこの小鳩たち、浅瀬の砂にまといつく塩水とは打って変った清流——)

こうした自責の念がときに昂じて、後年の“Terrible Sonnets”を思わせる自己憐愍と神への反抗を詩行にあらわすこともあった。やはり同じ年の無題の作品からの引用である。

My heaven is brass and iron my earth:
Yea iron is mingled with my clay,
So harden'd is it in this dearth
Which praying fails to do away.
Nor tears, nor tears this clay uncouth
Could mould, if any tears there were.
A warfare of my lips in truth,
Battling with God, is now my prayer.

(わが天は真ちゅう、わが地は鉄。さよう、わが身の土くれは鉄とまざり、祈っても追い払い得ぬこの飢えに冷たく固まる。涙もこの醜い土くれをこねなおすことはできぬ——たとえ涙があるとしても。まことわが唇のいくさは今や神と戦うわが祈り。)

そうはいっても、この絶望的な気分がいつもホプキンズにのしかかっていたわけではない。むしろ感覚による自己、地上的な自己、個としての自己を超克して、絶対的な信条——神の恵みと信仰の安らぎ——を得たいと切に願う気持が支配的であった。そして当時の宗教界に渦巻いた教義の葛藤、あるいは伝統的な宗門各派の係争にも影響されて、ホプキンズは進むべき道を容易に確信することができなかつた。1866年の四旬節に作られた *Nondum* はその間の事情を語る。

We see the glories of the earth
But not the hand that wrought them all:
Night to a myriad worlds gives birth,
Yet like lighted empty hall
Where stands no host at door or hearth
Vacant creation's lamps appal.

(われらは地上の荘れいを見るけれども、それを作り給うたお手を見ることはできない。夜空は無数の小世界を生みだすけれども、輝く大広間の戸口にも妒辺にもあるじの見えぬごとく、空しく創造のともし火が人をおひけさせる。)

星づく夜空を主のいないこうこうたる客間に見たてる技巧はあざやかである。そして同じ第4聯では無限に臨む

おびえが描かれる。

And still th'abysses infinite
Surround the peak from which we gaze.
Deep calls to deep, and blackest night
Giddies the soul with blinding daze
That dares to cast its searching sight
On being's dread and vacant maze.

(しかもわれらの峯より見入るまわりを限りない深淵が囲み、深みは深みを呼び、存在の恐ろしくまた空しい迷宮にあえて探求の目を向ける心には、目のくらむ畏怖を与える。)

続いて第5聯は多様な教条の相剋から真理のあらわれが妨げられるのを悲しむ。

And Thou art silent, whilst Thy world
Contentds about its many creeds
And hosts confront with flags unfurled
And zeal is flushed and pity bleeds
And truth is heard, with tears impearled,
A moaning voice among the reeds.

(しかもおん身は黙し給い、その間地上界では多くの教義がせめぎ、宗徒は旗をかかげて争い、熱情がほとばしり、憐愍が血を流し、真理は真珠の涙を光らせてあしの間うめきを洩らす。)

そして最後の聯に至って、やさしい恩寵の訪れを待ちわびる気持が巧みな比喻で読者の胸にしみる。

Speak! whisper to my watching heart
One word—as when a mother speaks
Soft, when she sees her infant start,
Till dimpled joy steals o'er its cheeks.
Then, to behold Thee as Thou art,
I'll wait till morn eternal breaks.

(語れ、わが見まもる心にひとことをささやき給え——母親が幼な子のおびえるのにやさしく話しかけ、やがて喜びのえくぼがその頬にしのが寄るごとくに。そうすれば、おん身の姿をあるがままに見るために、われは永遠の朝の明けるまで待つ。)

曲折の末、ホプキンズはその生涯を托すべき信仰へと近づいた。*Nondum* の書かれた年、大学在学3年目の秋に、ホプキンズは両親や知人たちの強い反対と懸念を振り切ってローマ・カトリック教会に改宗し、その2年後にはイエズス会の聖職者になる決意を固めて、数年に及ぶ所

定の修行に服した。改宗と出世間については、それぞれ思想的にも環境の上からもそれなりの必然があったけれども、事態の進展にはいささか性急さを感じさせる面もあった。学友のひとり、1866年7月24日の日記に、“Walked out with Hopkins and he confided to me his fixed intention of going over to Rome. I did not attempt to argue with him as his grounds did not admit of argument.”（ホプキンズと外を歩いて、ローマカトリック教徒になるという彼の動かぬ決意を打ち明けられた。彼の論拠は議論を許さぬものであったから、わたしは彼と議論を試みはしなかった。）と書いている。ホプキンズの決断と行動には“Faith”に達した結果というよりは、むしろ“Faith”に達するための飛躍という趣きがあった。これ以外には信じられないという信仰の銚型の中に自らをとかし込み、いわば退路を絶つことによって究極の安定に達したいと願ったのではなかったか。ともかくホプキンズを待っていたものは、肉体にも精神にも厳格きまわらない訓練の期間であり、入会に際してはそれまでに書いた詩のすべて——ホプキンズはすべてと思った——を焼き、かつ7年にわたって完全に詩作を絶った。

1868年24歳で修道僧の生活に入り、1877年33歳で敝品を受けるまで約9年の修練期間を通して、神のみ心に恥じない聖職者であろうとするホプキンズの決心は、ひときわ強固なものとなった。この覚悟は終生ゆらぐことはなかったけれども、ただそのためには、激しい歓喜を経験する一方で、苛烈とも呼ぶほかほか恐ろしい戦いもまた避けることができなかった。ともあれ詩が書かれなかった時期にホプキンズがどのような思惟の世界を経たかをうかがわせる資料として、それに対応する期間の日記が残されている。内容の大部分は克明な自然観察の記録で、のちに詩の材料となったもろもろの対象が科学者の眼の緻密さでしるされている。ホプキンズの特徴を示す独特な造語として知られる“inscape”と“instress”も、このころの日記以降頻繁に使われた。

ホプキンズはこの2つの単語を特に定義づけすることもなく、どんな書きものの中でも、名詞あるいは動詞として自由に用いたが、ホプキンズにしてみれば、これらの言葉が意味するものはあまりに自明で説明のしようがなかったのに違いない。日記の中には次のような言葉が見られる。“I thought how sadly beauty of inscape was unknown and buried away from simple people and yet how near at hand it was if they had eyes to see it and it could be called out everywhere again.”

（愚かな人びとがインスケイプの美に気づかず埋もれさせていることをわたしは悲しく思い、またもし見る眼が

あればそれはすぐ手元にあつて、どこへでも呼び出すことができるのにと思った。）

またつりがね水仙は日記の中でしばしばホプキンズの関心の対象となったが、1870年の5月に“I do not think I have ever seen anything more beautiful than the bluebell I have been looking at. I know the beauty of our Lord by it. Its inscape is mixed of strength and grace, like ash tree.”（わたしは自分の見ているつりがね水仙以上に美しいものを見たことがないと思った。わたしはそれによってわが主の美しさを知ることができる。そのインスケイプにはとねりこの木と同じく強さと優しさが混り合っている。）とあり、翌年5月にはかなり長い微細な観察の中に“The bluebells in your hand baffle you with their inscape, made to every sense: if you draw your fingers through them they are lodged and struggle with a shock of wet heads;”（つりがね水仙を手にするとそのインスケイプが身体中の感覚に訴えて、とまどいを覚えさせる。花を指で軽くなざると、しめった頭部をかしげてさからう。）などと書かれた。

正確な定義づけはむづかしいにせよ、“inscape”は事物のおもてに表われる特徴を生み出す源となる、そのものの内に秘められた個別的な性質とでも説明すべきもの、また“instress”はその“inscape”を生み出す動力のことであり、前にも触れたように、この詩人の稀な感官の力と深いかわりがあった。現世を形づくるすべては個体の知覚を待ってその存在を保証されるのであり、感覚が存在の根源へとさかのぼるのは、大もとの知覚が鋭く豊かな働きを主張して止まないからである。そしてこの敬虔な訓練と学習の期間に、ホプキンズが万物に向ってその個別性に樞要を認めたということは見逃せない意味を持った。感覚の跳梁を許すとして詩を書くことを自らに禁じながらも、ホプキンズが“inscape”と“instress”に心を傾ける日々を送ったということは、ホプキンズの中で地上の個と無限の全能とが重なりはじめたということでもあった。移ろう感覚を押し殺すことで不変の信条に到るのではなくて、はかない生を永却の実在の托された小さな表われと見るようになったということである。ここでようやくホプキンズは、つりがね水仙によって神の美しさを知ると観ずることができた。

この幸せな内面の変化は、いうまでもなく9年に及ぶ献身的な修道の生活によってもたらされた。世俗を離れた僧院での静かで厳しい毎日が、ホプキンズの精神に安らぎを与え、そのまじりけのない集中力を一段と昂める

のに役立った。峻厳で知られるイエズス会の修練は、開祖イグナティウス・ロヨラが *The Spiritual Exercises* の中で示した教えを実践するという形で進められる。この書物は16世紀にスペイン語で書かれたが、その一部にあたる“Principle and Foundation”の英訳を試みたホプキンスのノートが残されている。そのはじめに“Man was created to praise, reverence and serve God Our Lord, and by so doing to save his sou'. And the other things on the face of the earth were created for man's sake and to help him in the carrying out of the end for which he was created. Hence it follows that man should make use of creatures so far as they help him to attain his end and withdraw from them so far as they hinder him from so doing.”(人はわれらの主である神を称え、敬い、これに仕え、そうすることで自分の魂を救うように作られた。そして地上の他のものは人のために、人が自分の作られた目的を行なうのを助けるために作られた。その故に人は神の創造物が自分の目的を全うするのに助けとなる限りはこれを用い、妨げとなる限りはこれを棄てなければならない。)とある。イエズス会修道士としてホプキンスは研修の期間中ひたむきにこの思想の実践に赴いたから、人間を中心とした地上のすべてが神の御心にかなうという確信に向って近づくことができた。

後年ホプキンスが *The Spiritual Exercises* に基いて行った解説の中には次のような言葉がある。“The sun and the stars shining glorify God. They stand where he place them, they move where he bid them. ‘The Heavens declare the glory of God.’ They glorify God, but they do not know it. The birds sing to him, the thunder speaks of his terror, the lion is like his strength, the sea is like his greatness, the honey like his sweetness, they are something like him, they make him known, they tell of him, they give him glory, but they do not know they do.”

(太陽と星とは輝いて神に栄光を捧げる。それらは神の定め給うた場所に位置し、命じ給うたままに動く。「天体は神の栄光を宣す。」それらは 神に栄光を捧げしかもそれに気づかない。鳥は神に歌い、雷は神の恐ろしさを語り、獅子は神の強さを思わせ、海は偉大さを、蜜は甘さを思わせる。すべて神に似た何かであり、神を知らせ、神を語り、神に栄光を与える。しかしいずれも自分のしていることに気づかない。) またそれとは別に“Smiting an anvil, sawing a beam, driving horses, scouring, everything gives God some glory if being in his grace you do it as your duty.”(かなとこを打ち、はりを挽

き、馬を駆り、物を磨く、このいずれも、もしあなたが神の恩寵に与って務めとして行なうのならば、なんらかの栄光を神に与えることになる。)と述べている。こうしてホプキンスはイグナティウス・ロヨラの教えに全面的に服することによって、個は全体をあらわし、有限は無限の一部であるという強くめでたい信条に導かれることができた。

なおこの時期にホプキンスは13世紀の神学者ダンス・スコウタスの著作をはじめ読み、以降深くその思想に傾倒することとなったが、このこともまたホプキンスが一段と高いひとつの解脱に到ったことと根を同じくしていた。スコウタスの哲学では事物の個性性が重視され、「これ」を「これ」たらしめる最後の特徴を“haecceitas (=thisness)”と名づけることで独自の“Principle of Individuation”が成り立ったといわれる。またスコウタスはまず個性が感覚と結ばれた悟性の働きによって“first act of knowledge”として感得され、次いで抽象および比較によって普遍性が“second act”として認知されるとして、その“theory of knowledge”を主張したといわれる。これらがホプキンスの“inscape”および“instress”という考えと照応することは一目瞭然である。スコウタスの著作をはじめ手にした喜びをホプキンスは1872年の日記に“...and [I] was flush with a new stroke of enthusiasm. It may come to nothing or it may be a mercy from God. But just then when I took in any inscape of the sky or sea I thought of Scotus.”(新しい熱中の流れが溢れた。これはなんでもないかも知れないし、神からのお恵みであるかも知れない。しかしこのときは、空や海のインスケイブが少しでも目に入ると、わたしはスコウタスを思った。)と書いた。

それから数年後にホプキンスは懐しいオクスフォードへ牧師として赴任したとき、ここに暮したといわれるスコウタスを称えるソネット *Duns Scotus's Oxford* を書いた。オクスフォードの街と自然の調和をほめ、その田園が壊されるのを悲しむオクティヴのあとに、次の詩句がある。

Yet ah! this air I gather and I release
He lived on; these weeds and waters, these walls
are what
He haunted who of all men most sways my spirits
to peace;
Of reality the rereest-veinèd unraveller; a not
Rivalled insight, be rival Italy or Greece;
Who fired France for Mary without spot.

(しかもあわたしの吸って吐くこの空気で彼もまた生きたのだ。この草と川、この壁は彼のいつも行き来したところ——誰よりもわたしの心を大きく鎮めてくれたあの人の。稀な才に恵まれて真実を解き明かした人、イタリアやギリシヤと張り合って一歩も引かない洞察の人、けがれない聖母を称えてフランスを燃え立たせたあの人。)

ホプキンズはこのようにスコウタスの学説に深い共鳴を見出し、そこから新しい思惟の世界を開く手がかりを与えられた。ホプキンズにあっては、思想が人から切り離された単なる知識にとどまることはあり得ない。だいたいホプキンズは思想を解説したり議論したりすることがなかった。思想は言葉そのものであり、言葉は人間の生くさい息吹きであった。11年ぶりにオクスフォードに到着したとき、ホプキンズは空気や雑草や川や家並からスコウタスその人を肌と感じ、積年の敬愛を詩に托したのであった。

聖職につくための厳しい研鑽の期間を経て、ホプキンズはそれ以前の不安と絶望から除々に立ち直り、新しい“Faith”の高みへと導かれた。今や地上は美に満ち、それらはすべて神の美しさを表わした。万物は神に栄光を与えるためにあり、人の営みは神の恩寵に与かる限りすべて神に栄光を与えた。かつての禁慾は止揚されて恭虔な自由が獲得された。修行生活7年目の冬が訪れたときホプキンズは突如沈黙を破って大作 *The Wreck of the Deutschland* を書いた。そこには蓄積されたものの噴き出る趣きがあった。かつての作品に比してリズムは闊達、個性的となり、音は集中的、効果的なひびきを増し、言葉は純粹で簡潔で緊迫したものとなった。この詩は難破によって海中に吞まれた5人のフランシスコ派修道女の死を題材としたが、それは追悼の作品にも鎮魂の作品にもならなかった。修道女の溺死という事件を象徴としていわば詩人の宗教的形而上学を語るものとなった。新聞の記事に感動したホプキンズ自身の内面が、その中に歌い上げられた。

第1部は10聯より成り、それらは遭難とは直接かかわりのない詩人の神への想念を述べる。第3聯の前半で窮地に陥ったときのホプキンズが、一途に神のふところへ飛んださまが描かれる。

The frown of his face
Before me, the hurtle of hell
Behind, where, where was a, where was a place?
I whirled out wings that spell

And fled with a fling of the heart to the heart of
the Host.

(かのおん方の洗面を前に、地獄への落下を後ろにして、どこに、どこにわたしの、どこにわたしのいるべき場所があったか。その瞬間、わたしは翼をひろげ、心をはね出す思いで主の御胸に飛んだ。)

3行目の“where”以下、最も単純な言葉がつまんで出ないさまに、ホプキンズの経験した痛い煩悶がしのばれる。しかし今は自分の魂は神の胸に抱かれる鳩となった。第5聯の後半では、地上の荘れいの奥に神のお力の深く及ぶことが歌われる。

...tho' he is under the world's splendour and wonder,
His mystery must be instressed, stressed;
For I greet him the days I meet him, and bless
when I understand.

(かのおん方はこの世の輝きと驚きの底にいますけれども、その神秘の力は強く感じとられ、深く経験されなければならない。それはかのおん方に会うときは必ず歓迎し、かのおん方を知るときは必ず祝福するためである。)

個々の自然がそれぞれの根底に“inscape”を秘め“instress”の支配を受けるのと同様に、この世界全体の深奥に神とその力がある。ホプキンズはいつもそれを見落さないように心をあらたにした。

第2部へ入って第12聯から第17聯までは、あたかも詩人自身が受難しつつあるようにその夜のさまが描かれる。第17聯は夜の嵐の凄まじさを次のように書く。

They fought with God's cold——
And they could not and fell to the deck
(Crushed them) or water (and drowned them) or
rolled
With the sea-romp over the wreck.
Night roared, with the heart-break hearing a heart-
broke rabble,
The woman's wailing, the crying of child without
check——

(彼らはみな神の寒気と戦った。しかしかならずもなく、デッキに倒れ(デッキは彼らを砕く)あるいは水に倒れ(そして彼らを溺れさせる)あるいは難破船の上を海が跳ねるのに合わせてころがった。胸のやぶれる悲しみの声、とめどない女の泣き声と子供の叫びを耳にして、暗夜は胸のやぶれる思いで吠えた。)

第3行“(crushed them)”の主語は“deck”であり、

ここの関係詞の省略は“crush”の音の効果とあわせて、その場の光景に身の毛のよだつ思いをさせる。第5行の同じ音の繰り返ししが夜の咆哮を読者の聴覚に訴える。このあと第18聯から第31聯までは、故事への連想をからめながら英雄的尼僧の“O Christ, Christ, come quickly.”(「キリストよ、とく来ませ。’)という叫びの意味がいろいろに考察される。そして修道女の真情をおしはかることで、このヒロインを通してホプキンズ自身の思いが吐露される。やがて第28聯に至ってキリストの臨場を迎える。

But how shall I...make me room there:

Reach me a... Fancy, come faster—

Strike you the sight of it? look at it loom there,

Thing that she... There then! the Master,

Iipse, the only one, Christ, King, Head:

(しかしわたしなどにどうやって…わたしをそこへ行かせ給え。わたしに授け給え…想像も早く来たれ。—あなた方もその光景に打たれるか。見よ、あそこにそれが微かに浮ぶ。…かの女の見たもの…それあそこに、主たるおん方、かの人、唯一者、キリスト、王、首長。)

驚きと夢中とで言葉もしどろとなり、キリストへの恐懼に身のふるえを誘われる。“there”が何度も繰り返されて目の前に奇蹟のあらわれる感じを強める。“the Master”より“Head”まで同格語の連打がホプキンズのキリストへの思いをあらためて印象づける。このあと海の受難は神の恩寵にほかならず、神の偉大さを知り、主を迎える試練に恵まれた喜びが暗示される。第31聯の最終行

...is the shipwreck then a harvest,
does tempest carry the grain for thee?

(…それでは難破は収穫であり、嵐はおんに穀物をもたらしたのか。)

こうして第32聯から最後の第35聯まで再び第1部の主題が繰り返され、朗々たる神への祈りで全篇がしめくられる。

ホプキンズは *The Wreck of the Deutschland* を1875年12月に北ウエールズの聖ブエノス学寮で書いた。ここでは聖職に任ぜられる修練期間の最後の3年を過ぎたが、優しい自然に囲まれた学究の生活がホプキンズの心身にはよほど適したと思われる。*The Wreck of the Deutschland* 以後死の直前に至るまで、ホプキンズはいわゆる習作期の作品とは全く趣きを異にする独自の詩の世界を繰り広げたが、特に絃品を受けてこの地を去る前の数か月間には、至福の時代を告げる一群の作品をまるで噴きこぼれるように書き上げた。*God's Grandeur* に

はじまるその10篇のソネットはすばらしきで読むものの目を見張らせる。イエズス会士の灼熱した宗教的信条が生得の豊潤な感覚を天高く燃え上らせたとてもいうほかはないのである。

God's Grandeur はこのときのホプキンズの思想をじじかに語る。

The world is charged with the grandeur of God.

It will flame out, like shining from shook foil;

It gathers to a greatness, like the ooze of oil

Crushed……

.....

....., nature is never spent;

There lives the dearest freshness deep down things;

And though the last lights off the black West went

Oh, morning, at the brown brink eastward, springs...

Because the Holy Ghost over the bent

World broods with warm breast and with ah!

bright wings.

(この世は神の荘厳に満ちる。それが揺れる金属はくのように輝きを発する。それは押しつぶされてにじみ出る油のように、少しずつ集って大をなす。………自然は決して尽きることがない。万物の奥底にはこの上なく親しみ深い新鮮さが生きている。そしていま最後の光が暗くなった西空に消えても、見よ、朝がうす明りの東の端におどり出る——聖霊がまるく寝ている世界をあたたく胸と、ああ輝く翼で巣ごもるようにかかえるから。)

神の荘厳と聖霊にだかれた自然の美しさとが、ホプキンズ独得の打ちつける音の響きと、くっきりしたイメージによってみごとに形象化された。そしてこの作品にすぐ続いて書かれた *The Starlight Night* では星空の美しさへの感動が背後にいます神への讚美と直結している。

Look at the stars! look, look up at the skies!

O look at all the fire-folk sitting in the air!

The bright broughs, the circle-citadels there!

Down in dim woods the diamond delves! the elves'-
eyes!

(星を見てごらん。ほら空を見上げてごらん。さあ、空中に坐った火の仲間たちを見てごらん。たくさん輝く街、環になった城を。ほの暗い森の奥に光るダイヤモンドの坑口を。妖精たちの眼を。)

これがホプキンズの感覚に映る夜空の星である。いわゆるスプラング、リズムと一面にちりばめられた感嘆符、第4行にある [d] の強い頭韻、“delves”, “elves”,

“eyes” の同音の繰り返えし、それらがきらめく星のイメージと融け合って、うしろにいます主を強烈に印象づける。詩の終りは

This piece-bright paling shut the spouse
Christ home, Christ and his mother and all his
hallows.

(ひとつひとつのきらめくとがり杭の囲いが、つれあいのキリストを中に安置する。キリストとその母とすべての聖者たちを。)

となって、天空にまたたく星の光がその奥に住まうキリストとマリアと聖者たちに重なる。この詩が書かれたあと約2か月のうちに3つのソネットが生まれ、次に *The Windhover* が作られる。ホプキンズの作品の中で最もよく知られ、あらゆる意味でこの詩人の特色をくっきりさせる作品である。この詩の中には神に直接言及された箇所はないにもかかわらず、朝空に舞う鷹の姿がキリストの気高さの象徴として浮び上る。完璧な飛翔を見上げるホプキンズの胸の感嘆がキリストへの憧れと一致するからにはほかならない。さらに *The Windhover* から2か月を経て——その間に *Pied Beauty* が書かれた——*Hurrahing in Harvest* が生まれる。ここでは自然の美しさはそのまま神の美しさであり、地上の喜びはそのまま永遠の喜びに通じる。

Summer ends now; now, barbarous in beauty, the
stooks rise

Around; up above, what wind-walks! what lovely
behaviour

Of silk-sack clouds! has wilder, wilful-wavier
Meal-drift moulded ever and melted across skies?
I walk, I lift up, I lift up heart, eyes,

Down all that glory in the heavens to glean our
Saviour;

And, eyes; heart, what lips yet gave you a
Rapturous love's greeting of realer, of rounder
replies?

And the azurous hung hills are his world-wielding
shoulder

Majestic--as a stallion stalwart, very-violet-sweet!
These things were here and but the beholder
Wanting; which two when they once meet,

The heart rears wings bold and bolder
And hurls for him, O half hurls earth for him off
under his feet.

(夏はいま終る。いまや荒々しい美しさで麦東がまわ

りに積まれ、ふり上げばなんという風の歩みであろう。絹とあら布のような、なんという愛らしい雲であろう。烈しく気ままに揺れるひき粉のかたまりが、空をよぎってこれ程にこねられ、溶かされたことがあろうか。救世主の落穂を拾うために、天の輝きのすみずみまでわたしは歩み、仰ぎ、心をそして目をあげる。目よ心よ、これほどまことの、これほど丸やかな熱中した愛の答えを、どんなにかんげせ、どんな唇が今までに与えてくれたことがあろう。青空にかかる山々は世をしろしめすおん方の荘大な肩——それはたくましく、しかもすみれの優しさをもつ駿馬の肩のよう。これらのものはすべてここにあった。ただ見る人がなかつただけだ。この二者がひとつたび会えば、心は大胆に、さらに大胆に翼をあげて、足下より大地を投げうち、おお半ば大地を投げうって天へと向う。)

感覚の世界と信仰の世界がこれほどめでたく一致することも稀ではあるまいか。ホプキンズは友人への手紙で “The Hurrahing sonnet was the outcome of half an hour of extreme enthusiasm as I walked home alone one day from fishing in the Elwy.” (“Hurrahing” のソネットはある日エルウィーの谷での釣りからひとり歩いて帰る途中約半時間の極度の熱中から生まれたものです。) と書いた。ホプキンズは一生のうちの最も幸せなときを過しつつあった。

Hurrahing in Harvest が書かれたのは 1877年 9月 1日であったが、この月の23日、絛品の日までにはさらに2篇のソネットが作られた。絛品のあと10月には、はやホプキンズは牧師補に任ぜられて北ウエルズを去り、チェスターフィールドのイエズス会教会学校での実務についた。ここでは健康を害したこともあって、生活は不快であったらしく、約半年の間1篇の詩も書かれなかった。そしてこの時を境にしてホプキンズの詩に少しずつ変化があらわれた。その変化は要約すれば、絛品前のソネットの中で作品の前面を占めた美しい自然が、絛品後には人間への関心にとって代わられはじめたということである。そのきざしと見られるものはすでに10篇のソネット群の中にも認められ、例えば最後の *The Lantern out of Doors* の第5行から第8行では、

Men go by me whom either beauty bright
In mould or mind or what not else makes rare:
They rain against our much-thick and marsh air
Rich beams, till death or distance buys them quite.

(わたしのそばを過ぎゆく人の中には、姿とか心とかその他なんでも明るい美しさで稀に思われる人がいる。

彼らはどんよりして湿地を思わせるこの空気に豊かな光線をそそぐ。しかしやがては死や距りが彼らを完全に買い取っていく。)

のように人間存在の不安定さに目が向けられた。また前に引用した *God's Grandeur* の第5行から第8行、あるいは *In the Valley of the Elwy* の後半部には自然を汚し、自然からはみ出した人間に批判の目が向けられている。*Hurrahing in Harvest* に見られた至福の状態は、僧院の狭い世界から一般社会の広い世界へ向う不安を前にして燃え上ったいわば最後の輝きであったかも知れない。

聖職者としての社会生活に入って最初の作品は *The Loss of the Eurydice* であったが、この詩は題材の類似にもかかわらず *The Wreck of the Deutschland* と違って大部分が難破の詳細な描写にあてられ、溺死した水兵たちへの嘆きが全篇を覆う。これ以降 *Duns Scotus's Oxford* や *Henry Purcell* のように天才を称えるもの、*The Handsome Heart* や *The Bugler's First Communion* のような自分の信徒に題材をとったもの等、人間への関心が次第に詩の主題となった。1880年に書かれた *Felix Randal* はその傾向を代表するもののひとつである。

Felix Randal the farrier, O is he dead then? my
duty all ended,
Who have watched his mould of man, big-boned
and hardy-handsome
Pining, pining, till time when reason rambled in
it and some
Fatal four disorders, fleshed there, all contended?
Sickness broke him. Impatient, he cursed at first,
but mended
Being anointed and all; though a heavenlier heart
began some
Months earlier, since I had our sweet reprieve and
ransom
Tendered to him. Ah well, God rest him all road
ever he offended!
This seeing the sick endears them to us, us too it
endears.
My tongue had taught thee comfort, touch had
quenched thy tears,
Thy tears that touched my heart, child, Felix,
poor Felix Randal;
How far from then forethought of, all thy more
boisterous years,
When thou at the random grim forge, powerful

amidst peers,

Didst fettle for the great grey drayhorse his
bright and battering sandal!

(蹄鉄工のフェリックス・ランダル、おお、では彼は死んだか。わたしの神父の務めも終わったか。わたしは骨太で美丈夫だったあの姿がやつれにやつれて、とうとう理性も錯乱し、四つの死病が力を得て競いあうところまで見守ってきたのだが。病が彼を負かした。短気を起して、はじめは彼も口ぎたなく呪ったが、塗油式の油を注がれたりして気持も直った。もっともわたしが猶予とあがないを与えた数か月以前から彼には聖なる心が生まれてはいた。ああ、でも神よ、彼がどんな道で罪を犯したにせよ、彼に安らぎを与え給え。こうして病人を見舞うことは、信徒にわたしたちを懐しく感じさせるし、またわたしたちにもそうさせる。フェリックスよ、わたしの舌はおまえに慰めを与え、手を触れることでおまえの涙を鎮めたが、その涙はわが子フェリックスよ、気の毒なフェリックスよ、わたしの心に触れた。おまえが乱石積の真険な鍛冶場で、仲間うちでもひとときわ力強く、大きな灰色の荷馬車のために、まばゆい、地を打つ蹄鉄を鍛えたころ、あの血気盛んな時期に、こんなことがどうして考えられたらうか。)

ここには詩人の心情の優しさと、関心の広がり、それに応ずる言葉の成熟が示されている。ホブキンズはいろいろなプロソディーを試みたが、この詩は“outriding”の詩脚を持つアレキサンドル格のソネットという風変わりである。ホブキンズはこれと同型のものを他にも作ったが、1行6歩格の長さからくる退屈を避けて、口ばやな調子を維持した。この詩に歌われたものは、ホブキンズが信徒のひとりを見取った感懐ではあったが、このとき詩人の心に去来したのは死者へのあわれみと人間存在への言い知れぬ頼りなさであったに違いない。

詩の中でホブキンズの関心の中心が自然から人間に移ったということは、北ウェールズでの学究的生活を離れて、都会地で世間相手の実務についたという生活上の変化に負うところが大きかった。しかし地上の全存在の中で人間だけが他のすべてから区別されるとする考え方は、すでにイエズス会の基本的な思想に含まれていた。さきにも引用した *The Spiritual Exercises* の本文冒頭に基づく説明の中で、神父ホブキンズは太陽、星、鳥、雷、獅子、海、蜜…自然のすべてがそれぞれに神に栄光を与えるが、しかしそれらは気づかずにそれを行なうと述べたあとで、“But man can know God, can mean to give him glory. This then is why he was made, to

give God glory and to mean to give it, to praise God freely, willingly to reverence him, gladly to serve him. Man was made to give, and mean to give, God glory.” (しかし人間は神を知り、神に栄光を与えようと思えることができる。これこそ、つまり神に栄光を与え、そうしようと考え、神を思うままに称え、進んで神を敬い、喜んで神に仕える、それが人間の作られた理由である。人間は神に栄光を与え、また与えよう考えるために作られた。)と説いた。人間は自然の一角を占めてその全体が神の偉大をあらわすが、人間だけはそれを意志し、行為しなければならぬ。そのためにこそ人間は作られたのである。この点をもとにしてホプキンズの思惟の世界に人間がクローズアップされた。そしてそこから引き出された問題は、人間だけが神のみ心に反しているのではないかという疑問でもあった。

ホプキンは牧師の職を奉じて以後転々と任地を変った。再度の研修期間1か年を含めて死没までの12年間に9回のところがえである。最後の任地ダブリンが最も長く5年半もあったから、他は推して知るべし。ホプキンは教会や学寮での処務に向かなかつたし、人づきあいも巧みではなかつた。加えて健康にも恵まれなかつた。日常の仕事は忙しく、責任は重く、しかもしばしば工業地区が勤務地となった。オクスフォードからリヴァプールへ赴任したとき友人にあてて “I have left Oxford and am appointed Liverpool. I am uncertain how long I shall be at Leigh. The place is very gloomy but our people hearty and devoted.” (わたしはオクスフォードを離れてリヴァプールへ転勤しました。この地にいつまでいられるか自信がありません。ここはたいへん陰うつなところですが、住民は親切で信仰あつた人たちです。)と書き、その後別の友人にあてて “At least I can say my Liverpool work is very harassing and makes it hard to write.” (少なくともリヴァプールの仕事はたいへん辛いもので、そのために便りもできません。)などと書き送った。イエズス会の教訓を忠実に守ってホプキンはひたすら務めに励んだけれども、自分が主のみ心に応えていないという自責の念は容赦なくその瘦軀を打った。再び *The Spiritual Exercises* のはじめの部分についてホプキンの行なった解説を引用すると、 “But man can know God, can mean to give him glory... I was made for this, each one of us was made for this. Does man then do it? Never mind others now nor the race of man: Do I do it?” (しかし人間は神を知り、神に栄光を与えようと思えることができる。…わたしはこのために作られた。わたしたちのおのおのはこのために作られた。さて人間はそれをなしているか。いま他

の人たちのことや人類全体のことはさておいて、わたしはそれをなしているか。)人間への注視は人間不信さらには人間否定を見通す結果を招いたが、ホプキンズの思想の中で、それが人間一般に関する観念にとどまることはあり得なかつた。個に基づく人間——結局は自己に目が向けられるのは必然の成り行きであつた。

この時期のホプキンを悩ましたことの一つに出版問題があつた。*The Wreck of the Deutschland* と *The Loss of the Eurydice* はイエズス会の雑誌 *The Month* への掲載をことわられてホプキンを失望させた。個人の名声を求めることはイエズス会の教えに反することであつたから、ホプキンは自分の作品が出版されるように図ることは許されなかつたし、そのような気持はもちろん持っていなかつた。ただ神のみ心に適って自然に自分の作品が世に出ることは望んでいたに違いない。ところがこれとは別にホプキンの詩を印刷に付す計画がその詩友たちの間でもち上つた。ホプキンは、はじめ友人のひとりブリッジズにあてて “I do not write for public. You are my public...” (わたしは公衆に向けて書くではありません。あなたがわたしの公衆です…)とことわりの手紙を出した。しかしその後再びこの問題に触れて “When I say that I do not mean to publish I speak the truth. I have taken and mean to take no steps to do so beyond the attempt I made to print my two wrecks in *the Month*. If some one in authority knew of my having some poems printable and suggested my doing it I shd. not refuse, I should be partly, though not altogether, glad. But that is very unlikely. All therefore that I think of doing is to keep my verses together in one place—at present I have not even correct copies—, that, if anyone shd. like, they might be published after my death. And that again is unlikely as well as remote.” (わたしが出版するつもりはないと申しましたとき、わたしはほんののことを言ったのです。わたしは *The Month* に2つの難破の詩を印刷しようと試みた以上に、そういう手段をとるつもりはありませんでしたし、またとりませんでした。もしどなたか教会の権威ある方が印刷できる詩をわたしが持っているを知って、そうしろと奨めて下さるのならば、わたしはそれを拒みませんし、完全にではありませんが、いくぶんうれしく思います。しかしそれはありそうもないことです。ですからいまわたしに考えられることはわたしの死後もしたれかが出版したいと思ったとき実行できるように、自分の詩をひとところにまとめておくということだけです——目下のところ正しい写しも手元にありません。しかしこれは遠い先の話ですし、その上ありそうも

ないことです。)という手紙を送った。詩が「表わし伝える」かぎりには、意識するしないは別として、暗黙に「受け取る」側を前提とする。時間と空間のわくを越えて、やはりホプキンスは読者を求めた。出版の試みは結局実現しなかったけれども、この問題はホプキンスにひとつの苦悩を残した。心の奥をのぞいて自分がほんとうに主のみ心にかなうかと問わずにはいられなかった。もうひとりの友人ディクソンにたいしても、このことに関して、名声を犠牲にするかどうかは問題ではなくて、犠牲にたいして自分に怠りがなかったか、詩を書くことに捉われなかったか、不安と虚栄心を抱かなかったか、そしてこれらのことで神の厳しい審判を受けるのではないかが問題だと便りした。詩もしくは芸術は究極において個に発し、現世をみざすものにはかなならない。ここに再びホプキンスの中で、個我と超絶、地上と無限の乖離が大きな裂け目をあらわした。

紋品前のソネット群に見られたホプキンス内部の感覚と信条のみごとな調和は、紋品後の実社会での経験が深まるにつれて自ずから崩れた。1881年二度目の修道期間に入るまでの4年間に16篇の詩が書かれたが、それらは詩人の内面を反映して次第に暗さを増した。このころの作品中には受持区域の信徒に取材したものが多く、先の *Felix Randal* もその一例である。そこには信者たちへの詩人の優しい気持が汲み取られるが、歌われた対象には心正しく、みめ形よい若者が多かった。 *The Handsome Heart* の少年は

Manly hearted! more than handsome face...
Beauty's bearing or muse of mounting vein,
(みめよい顔だち以上に上品な心——美しいものごしあるいは高まる物思い)

と表現されており、またその次に書かれた *The Bugler's First Communion* の若い兵士は、

Breathing bloom of a chastity in mansex fine.
(みごとな男性の純潔が息づく花のさかり)

であった。そういえば *The Loss of the Eurydice* に登場する溺死した水兵も “He was all lovely manly mould,/Every inch a tar/Of the best we boast our sailors are.” (彼はまさに男の美しい身体の持主、いちぶのすきもない船乗りで、われらが誇るより抜きの水兵) であった。心の美しさはともかく、人間の顔かたちの美しさにホプキンスはどう感じ、どう考えていたのだろうか。人一倍感じ易い心のホプキンスが、肉体の佳美に盲目であったはずはない。 *Leaden Echo and Golden Echo* の中では青春の乙女の美しさを “...the wimpled-water-

dimpled, not-by-morning-matched face/ The flower of beauty, fleece of beauty,” (さざ波立つ水のえくぼ、朝の美しさも敵わぬかんばんせ、美の羊毛) と呼び、それが衰える前に “Resign them, sign them, seal them, send them, motion them with breath,/ And with sighs soaring, soaring sighs, deliver/ Them;... Give beauty back, beauty, beauty, beauty, back to God, beauty's self and beauty's giver.” (それをあきらめよ、署名し、封印し、発送し、息吹きして去らせよ。空高く吐息してそれを引渡せ。…美を美を美を神に、美のみなもと、美の与え手に返せせ。) と説いた。

しかし、人間美の感覚を閉じ込めて神に引渡すことがそれほど容易にできるとは思われない。ごく早い時期の作品に示された豊かな感能への傾きを思い浮べるとき、若いホプキンスを禁慾に赴かせ、僧籍に身を投じさせたあの感覚への不安と恐怖のいちばん底にひそんだものは、あるいはこの人間の美しさへの深く激しいおののきであったかも知れない。

前に引いた *The Bugler's First Communion* の若いラッパ手は丘の向うの兵營に住んでいた。そしてホプキンスにとって

How it does my heart good, visiting at that bleak hill,
When limber liquid youth, that to all I teach
Yields tender as a pushed peach,
Hies headstrong to its wellbeing of a self-wise self-will!

Then though I should tread tufts of consolation
Days after, so I in a sort deserve to

(あの荒涼とした丘を訪れることが、わたしの心にどれほど幸せをもたらしたことか。しなやかで、みずみずしい青年が、桃の実を押すときのように柔くわたしの教えるすべてに従い、自分の賢い意志から生まれた幸福へまっしぐらに進む。わたしはそのあと数日なくさめの草地を歩む思いをしが、その報酬はある意味で自分が受けてよいもの)

と思い、この若者が神の恩寵によって正しい道を進むようにと祈る。しかし

Let me though see no more of him,...
(でもわたしはこれ以上彼と会わないようにしよう…)

と心に決める。ホプキンスの “inscape” にあたる根源の知覚には、感覚の放恣へつながる危険な要素と、同時にそれを抑えて思想の強堅に向わせる要素とが並存した。

ホプキンは内奥の感覚をとどめ、鍛え、そうすることで堅牢な信条に到る集中的な力を保った。ラッパ手の詩を書いたのと同様にして送ったブリッジズあての手紙で、ホプキンは “I think then no one can admire beauty of the body more than I do, and it is of course a comfort to find beauty in a friend or a friend in beauty. But this kind of beauty is dangerous.” (身体之美をわたしほど讚美するものはいないと思います。そしてもちろん友の中に美を、あるいは美の中に友を見ることは慰めとなります。しかしこの種の美は危険です。)と書いた。ホプキンズにとってイエズス会士の覚悟がゆらぐことはなかったけれども、そのためにこそ感覚と信条の緊迫した拮抗には絶えず大きな力が必要とされた。人間美への讚嘆がホプキンズの詩の中で、まことむき出しにされることはなかったが、それはホプキンズに終生まつわたった罪の意識のいちばん深いところに閉じられていたためかも知れない。神父としての市井の日々ホプキンは恐怖の淵を見る思いを時に経験したのではなかったろうか。

任地の教会や学寮での体験がホプキンズをして神の王国にある人間のあり方に検証の目を向けさせ、人間批判を呼びこみ、結果としてそれが自己の否定へとつながった。二度目の研修に入る以前すでにホプキンズの作品には不安と危惧が暗い陰を次第に濃くした。1879年にオクスフォードで書かれた *Peace* には

When will you ever, Peace, wild wooddove, shy
wings shut
Your round me roaming end, and under be my
boughs?
When, when, Peace, will you, Peace? I'll not play
hypocrite
To own my heart:

(平和よ、野鳩よ、いつおまえはその憶病な翼を閉じ、あてどなくまわりを飛ぶのをやめて、わたしの枝にとまるのかいつ、平和よ、それはいつなのか。わたしは自分の心を打ち明けるのに猫をかぶりたくはない。)

のように、心の動揺が詩行に示された。この詩はホプキンズが “Curtal Sonnet” と呼ぶ短縮型——6 詩脚 9 行半のソネットで、詩人の満たされない心が変型に反映しているようにも感じられる。しかしその結びには次のようにまだ希望を失っていない気持が歌われた。

And when Peace here does house
He comes with work to do, he does not come to coo,
He comes to brood and sit.

(そして平和がここに宿るとき、それはなすべき仕事をたずさえて、やさしく鳴くためではなく、巢について卵をかえすためにやって来る。)

ホプキンは1881年から再び所定の修行に服した。これは1年間見習修道士の生活に戻ることで、イエズス会士としての初心に帰り、聖職者の誓いを新たにすることである。ホプキンズの詩作にちょうど1年の空白が生じたが、その後の作品の中では、以前からたちこめた陰うつがますます暗さを増した。世俗との触れ合いを絶って、ひとり祈とうと冥想の日を過すうちに、ホプキンは人間の本性を見つめ、自我を根元にさかのぼって吟味する方向を一段と進めたに違いない。静修後の最初の作品と思われる “As kingfishers catch fire, dragonflies draw flame,” (かわせみが火と燃え、とんぼが焰となるように) ではじまる無題のソネットは、張りつめた音の世界を詩の中に形象化したすばらしい詩行のあとに、次の言葉が語られる。

Each mortal thing does one thing and the same:
Deals out that being indoors each one dwells;
Selves—goes itself; myself it speaks and spells,
Crying What I do is me: for that I came.

(この世のものは皆ただひとつの同じことをする。おのおのの内部にひそむ存在を語る。つまり自己を実現し——自己の道を行く。自我を語り、つづり、わたしのすることがわたしで、そのためにわたしは生まれたと叫ぶ。)

ここには人間は自己の “inscape” の表現にほかならないとするスコウタス的な思想が示されており、従って個は全能のひとつのあらわれという考え方は否定されていない。次に書かれた *Ribblesdale* では自然をこわし、世界の調和を破る人間の不遜に批難が加えられる。

Ah, the heir
To his own selfbent so bound, so tied to his turn
To thriftless reave both our rich round world bare
And none reck of world after, this bids wear
Earth brows of such care, care and dear concern.

(ああ継承者たる人間よ、個我に縛られ、性癖に繋がれ、豊かに丸い世界をいたずらに剥ぎ取り、あとを顧みないもの、それが大地に心痛と不安の表情を帯びさせる。)

この詩に歌われた自然は静修後の任地ランカヤの山間であったが、このあとホプキンは生涯最後の任地ダブリンへと赴任する。ときにホプキンズ39歳の1月であった。

ここでの職務は Catholic University College の教授としてギリシャ語を担当することであった。それは名誉ある地位には違いなかったが、着任早々ホプキンスは知人にあてて、年俸 400 ポンドの高給にもかかわらず、試験は年に 6 回、志願者は 750 人に及ぶこと、そしてステイヴン・グリーン公園に金を敷きつめてもらっても引き合わないと便りした。ホプキンスは責任の重さを感じて、講義や採点に精根を傾けたから、生来の虚弱も手伝って過労が重なった。翌年のはじめごろには“weak in body and harassed in mind” (身体は弱り、心は悩む) あるいは“my fits of sadness, though they do not affect my judgment, resemble madness.” (わたしの悲しみの発作は判断力に影響を及ぼすほどではなくとも、狂気に似ている) などの文字が友人への手紙に示された。肉体と精神の重圧は人間の本性——個我の“inscape”にたいするホプキンスの否定的な考えをさらに助長した。人間の“inscape”は全存在の“inscape”——神に反するのではないかという恐れが次第に強まった。ダブリンでの最初の作品で“Terrible Sonnets”への先駆けと見られる *Spelt from Sybil's Leaves* にはそれが次のように表現される。

...Let life, wained, ah let life wind
Off her once skeined stained veined variety upon,
all on two spools; part, pen, pack
Now her all in two flocks, two folds—black, white;
right, wrong; reckon but, reck but, mind
But these two; ware of a world where but these
two tell, each off the other; of a rack
Where, selfwring, selfstrung, sheathe-and shelterless
thoughts against thoughts in groans grind.

(衰えた生を、ああ生を、かつては糸かせにとられ、染めわけられ、縞をつけられた各種の取り合わせから、すべてを 2 つの糸巻きに巻き取らせよ。さあ、すべての生を 2 つの群に、2 つの罫に選び、分け、集めさせよ——黒か白か、正か邪か。ただこの 2 つだけを教え、気を配り、心にかけてよ。これら 2 つが互いに峻別される世界、自分をしめ、自分を縛り、覆いも隠れ場もなく、思想と思想が対立しつつ、呻きをあげてきしむ拷問台に思いをいたせ。)

ホプキンスの内部で二者の背反がのびきならぬところへさしかかり、そのさまを切迫した言葉が伝える。この作品は 1 行に 8 つの強勢を持つスプラング、リズムで書かれ、ホプキンスが“the longest sonnet ever made” (これまでで作られた最も長いソネット) と呼んだものである。詩人の言い尽せぬ思いが過大な詩型を選び、激

した感じが打ちつける同音の連なりに托された。

この詩はホプキンスがダブリンに移って約 1 年後に書かれたが、それに続く 1 年間は絃品の年について多作の年となった。ただ内容は 8 年前の至福とは全く対称的な苦悩きわみを表わした。この年の作品の中心をなすものは世に“Terrible Sonnets”と呼ばれる 6 篇の連作である。そこでは *Spelt from Sybil's Leaves* に歌われた主題がさらに押し進められて、いわば極限に達した。最初のソネット *Carrion Comfort* は次の 4 行からはじまる。

Not, I'll not carrion comfort, Despair, not feast on thee;

Not untwist—slack they may be—these last strands of man

In me or, most weary, cry I can no more. I can;

Can something, hope, wish day come, not choose not to be.

(いや、わたしは決して、腐肉のなぐさめよ、絶望よおまえを楽しむことはしない。わたしの人間としての最後のより糸を——今はゆるんでしまったが——決して解きほぐしはしない。わたしは大へん疲れているが、もはやどうにもならぬなどは叫ばない。わたしはできる、何かができる。望むことができる。陽のさすのを願うことができる。在ることを止めないように選ぶことができる。)

このオクティヴの前半は一応は自殺へのいざないを退ける気持を歌う。ホプキンスに自らの生を絶つ誘惑がときに訪れなかったとは思われない。若いころの作品にも、中期のものにも、その暗示的に示される箇所はあった。しかしここでは身体的生命の停止と同時に、いやむしろそれを含めて、地上の個我の——自己の“inscape”の否定を拒否するといっているのである。ホプキンスの思惟の世界の展開から、肉を越えた魂の問題としてそれを読まないわけにはいかない。従って次の 4 行は個の主張が神からの反ばつをかうと訴える。

But ah, but O thou terrible, why wouldst thou rude on me

Thy wring-world right foot rock? lay a lionlimb against me? scan

Wirh darksome devouring eyes my bruised bones? and fan,

O in turns of tempest, me heaped there; me frantic to avoid thee and flee?

(それにしても、おお恐ろしいおん方よ、あなたはなぜ世を責めるその右足をわたしにかけて荒くゆさぶるの

ですか。獅子の足でわたしを踏みつけ、暗いむさぼる眼でわたしの傷ついた骨を偶々まで調べるのですか。そして、寄せ返えず嵐で積まれた穀物のわたしを煽るのですか。あなたを避けて逃げまどうわたしを。)

個我への固執は神への離反を意味する。人間は自分を支配してはならない。人は神に栄光を与えるためにある。神は人間の中にひそむ僅かの自尊心をも見別け、嵐を送って穀物の山からもみがらを吹き分ける。そのあとの詩人の思考がセステットに示され、次の3行で終る。

Cheer whom though? The hero whose heaven-
handling flung me, foot trod
Me? or me that fought him? O which one? is it
each one? That night, that year
Of now done darkness I wretch lay wrestling with
(my God!) my God.

(それにしても誰に歓呼するのか。天を司る手でわたしを投げとばし、足で踏みつけた英雄か、それとも、英雄と戦ったわたしか。(神よ!) わが神と組み打ちしてわたしが惨めに横たわった、今は去った暗黒のあの年あの夜、おおそれはどちらだったか。両方だったのか。)

自分がほんとに声援を送ったのは神か自我かを問い、詩人は深い罪の意識にひたる。2番目の“Terrible Sonnet”はホプキンス内部の確執の苦しみを示す。

No worst, there is none. Pitched past pitch of grief,
More pangs will, schooled at forepangs, wilder wring.
(最悪などというものは無い。悲しみの頂点を越えたところに、さらに苦痛が前の苦痛に教えられて、ひときわ激しくわたしを振り上げる。)

個我と神との離反は深まるにつれて苦悩を増す。ホプキンスは底知れぬ痛みを味わう。詩行はこのあともはや救いも慰めも及ばぬ心中の激動を描き、終りにその惨めさが極点に達したさまを示す。

Here! creep
Wretch, under a comfort serves in a whirlwind: all
Life death does end and each day dies with sleep.
(さあここで、惨めなものよ、つむじ風に役立つ慰めの下へ這え。すべての生を死が終らせ、日々は眠りとともに死す。)

対立の悩みが知覚の停止を求めるところまで来たことを、このソネットの終末は語る。そして“Terrible Sonnet”

の3番目は自我のもとである3つの“identity”について、そのいずれもが既に支えを失ったことを嘆く。ホプキンスは家族から孤立し、母国から孤立し、文学から孤立して、神に抗すべき自分がもはや崩れ去るのを感じた。最後の詩行は次のようにいう。

This to hoard unheard,
Heard unheeded, leaves me a lonely began.
(これ〔わたしの言葉〕は誰も聞かれずに蓄えられ、聞かれても心に留められないので、わたしはいつも独り始まりにたたずむ。)

弱い自分が全能の神に太刀打ちできないことは明らかであり、詩人は結局のところ原点にひとり残されるのである。続く4番目のソネットでは、ある夜の暗い時間の記憶から詩がはじまる。

I wake and feel the fell of dark, not day.
What hours, O what black hours we have spent
This night!
(わたしは自覚めて、暗の毛皮を感じ、昼を感じない。なんという時間を、おおなんという暗い時間を今夜わたしたちは過したることか。)

2行目の“we”は自分と自分の心である。暗い夜の時間は小さな個が神の無限に屈服せざるを得ない経験を意味する。そして詩は第3行以下この時間は結局自分の一生にほかないと述べ、さらに

And my lament
Is cries countless, cries like dead letters sent
To dearest him that lives alas! away.
(そしてわたしの嘆きは数知れぬ叫び、悲しく遠く離れ給うたこの上なくいとしいおん方への死んだ手紙に似た叫び。)

という。今や神へ向うにも、その距りのあまりに大きいことが嘆かれる。やがて神はあらためて詩人に捨てるべき自我をよく味わうように命ぜられる。

I am gall, I am heartburn. God's most deep decree
Bitter would have me taste: my taste was me;
Bones built in me, flesh filled, blood brimmed the
curse.

(わたしは胆汁だ。わたしは胸やけだ。神の最も深い命令がわたしに苦がみを味わえと命じ給う。わたしの味はわたし自身。呪いはわたしの中で骨を築き、肉を満たし、血を溢れさせる。)

…まや詩人は自我の味が堪えがたく苦しいことを認め、最後に世の亡者たちは皆自分と同じであろうと考える。次の第5のソネットは忍耐について歌う。そしてそこに危機を切抜けることのできる、微かながらしかし新しい一縷の望みを見出す。詩は次の書き出しではじまる。

Patience, hard thing, the hard thing but to pray,
But bid for, Patience is!
(忍耐は、まこと難しいもの！ ひたすら祈り、ひたすら目ざし求める難しいもの、それが忍耐！)

ホプキンズは苦しい戦いの末に忍耐という態度に思いをいたす。それは到達するのにまこと容易ならぬ道をたどらなければならない。そしてオクティヴの終りで詩人は、崩壊した自我を忍耐だけがいたわるといふ。

Natural heart's ivy, Patience masks
Our ruins of wrecked past purpose. There she basks
Purple eyes and seas of liquid leaves all day.
(自然の心のつたである忍耐が崩れた過去のもくろみの廃墟を覆う。そしてそこで紫の芽とうねる葉の海とを終日光にさらす。)

このあとソネットの後半は苦しむ自我を何とかして神に向けたいと願い、わが主こそ忍耐にほかならぬと悟る。

We hear our hearts grate on themselves: it kills
To bruise them dearer. Yet the rebellious wills
Of us we do bid God bend to him even so.
And where is he who more and more distills
Delicious kindness?—He is patient.

(わたしたちは自分の心が自分の心ときしみ合う音を聞く。心をこれ以上ひどく傷つけることは死を招く。しかもなお、わたしたちはその反逆の意志を神への恭順に向けさせ給えと願う、さて甘美な思いやりをますます滴らせるあの方にはどこにおられる——そのおん方こそ忍耐強いお方。)

キリストの忍耐に自分を重ね合わせることで頻死の自我を全能の神の秩序の中へ救い出すことができるのではないか。しかしこの立場は自我への固執がもたらす妻まじい戦いの後によりやく得られたものである。このあと最後のソネットは「忍耐」のソネットのあとを受けて、ささやかな明さを取戻す。

My own heart let me more have pity on; let
Me live to my sad self hereafter kind

Charitable; not live this tormented mind
With this tormented mind tormenting yet.

(わたし自身の心にもう少しあわれみを持とう。わたしの悲しい自我にこれからは優しく、慈悲深く生きよう。この苦悩する心が苦悩する心で苦悩しないように生きよう。)

“torment”の3度の繰り返しは、ホプキンズの苦悩の激しく連続したことを暗示する。そしてセステットに入って

Soul, self; come, poor Jackself, I do advise
You, jaded, let be; call off thoughts awhile
Elsewhere;

(魂よ、自我よ、さあ、あくせく暮すあわれな自己よ、疲れはてたおまえに忠告しよう。放っておけ。あれこれ考えることを、しばらくどこかへ逸らせ。)

このように神への帰依を取り戻し、つまらぬ自己を受入れることで自我への執着から解かれた新しい境地に詩人は達する。そしてソネットは次の句で結ばれる。

unforeseen times rather—as skies
Between pie mountains—lights a lovely mile.
(〔微笑が〕むしろ思いがけないときに——重なり合う山の合間のように——1マイルを美しく照らす。)

ここで6篇の“Terrible Sonnets”は終る。長い苦しい戦いをどうにか切り抜けたホプキンズは再びひとつの高みへと出ることを得る。絨品後の実社会でホプキンズが経験したあらゆる人間的悩み——公務、健康、人間関係、文学活動——はダブリンでの生活で集約されて、ひとつの頂点に達していた。鋭敏な感受性の詩人の内部で、自我の尊厳はしばしば深く傷つき、個の“inscape”は危機に見舞われた。そして一方では、神を稱えるために作られた自分が、人間的な自我にとられることで神を裏切ることになりはしないかという恐怖と不安がホプキンズをさいなんだ。ホプキンズは“Terrible Sonnets”の連作の時期を経て、個我の矮小を忍耐することが神の無限を受容することに通ずるといふひとつの悟りにたどり着いた。しかしこの考え方は積極的な諦念とでも呼ばれるべきもので、不変の信条からは依然として遠いものであった。実際、これら6篇のソネットが読者に与えるその強烈な印象は、ホプキンズが到着した新しい思想の啓示というよりは、むしろそこへ到るまでにホプキンズがたどった過程——地を這い回っても生きのびる自我の執念と、

それを寸分も許さない神の威力と、この双方の間に演ぜられる力闘——の集中と緊迫によってもたらされるように思われる。因みにその後のホプキンズの作品には、ある種の明るさが恢復される一方で、人間と神、感覚と信条の対立のテーマが依然として姿を変えてあらわれた。

例えばホプキンズの死の1年前に書かれた *That Nature is Heraclitean Fire and of the Comfort of the Resurrection* という長い題名の詩では人間の死と不滅の問題が取扱われている。詩型はスプラング・リズムの1行6詩脚、2つのコード付きという長いソネットで、この型破りのプロソディーに、音とリズムと形象とがマッチしてホプキンズの技巧の極を示した。第10行目からの詩句が生のはかなさを歌う。

...quench her bonniest, dearest to her, her clearest-
served spark
Man, how fast his mark on mind, is gone!
Both are in an unfathomable, all is in an enormous
dark
Drowned. O pity and indignation! Manshape, that
shone
Sheer off, disseveral, a star, death block out; nor
mark
Is any of him at all so stark
But vastness blurs and time beats level.

(自然の最も美しく新しい、最も個性のはっきりした火花である人間が消えるとき、その燃えた痕跡と心に刻まれた印しが、どれほど速かに消滅することか。どちらも底知れぬ、すべて巨大な暗やみに吞まれてしまう。なんと哀れで腹立たしいことか。はっきり他と区別されて星と輝いた人の形を、死は真黒に消し去る。人の印しはすべて跡を失い、無限がぼやけさせ、時が平らにしてしまう。)

個性としての人間にとって生命の消滅は避けがたい。地上的、感覚的自我のさいはてに死は待つ。知覚の鋭いホプキンズには若くから知覚の終えん——死が意識された。オクスフォード入学前に書かれたとされる *Spring and Death* の中で、春の花に秋の死を印す死神が不気味に描かれる。*The Wreck of the Deutschland* の第11聯人間は生に目を奪われて “[We] forget that there must/The sour scythe cringe, and the bleak share come.” ([われらは] 不気味な大鎌が振り下ろされ、冷たく光る鋤の刃が襲いかかるのを忘れる。) という。そして第32聯には “past all/ Grasp God, throned behind/ Death with

a sovereignty that heeds but hides, bodes but abides;”

(人間の理解を越える神は、死のうしろで厳かに玉座に着き、気を配りながらも姿をかくし、予見しながらも待ち給う。) とある。こうしてホプキンズにとって死の背後にはいつも神が座した。死を通して神を見たというべきかも知れない。早くからホプキンズに著しかった感覚への不安と恐れに行き止まりには死があり、死を越える普遍の中心に神が在った。*Leaden Echo and Golden Echo* では “Since, no, nothing can be done/ To keep at day/ Age and age's evils, hoar hair,/ Ruck and wrinkle, drooping, dying, death's worst, winding sheets, tombs and worms and tumbling to decay; / So be beginning, be beginning to despair.”

(老齢と老齢の禍、白髪、大小のしわ、衰弱、臨終、死の最後、経かたびら、墓とうじ虫と朽ち果てとを、どうしても喰い止める手だてではないのだから、さあ早く絶望するがよい。絶望するがよい。) とホプキンズはこのように観じたあと、作品の後半で若くて美しい青春のすべてを一刻も早く神に捧げて、永遠を求めよと説いた。人間のすべては神の栄光を稱えるために作られたからにはほかならなかった。

“Terrible Sonnets” の精神的危機を脱したあとのホプキンズは、心身の衰えに死の予感を持ったのかも知れなかった。しかし *That Nature is a Heraclitean Fire* の詩の終りには、詩人は肉体の死が来ようとも “Resurrection” によって一瞬のうちにキリストと化し、卑しい自己も不滅のダイヤモンドとなると歌うことができた。ギリヤ哲学に題材をとり、生涯の神学を詩化して、このときのホプキンズは地上的限界を克服する永遠の光を手に入れたかに見える。しかし死期を11か月後にしてホプキンズは神に反抗的な態度を示す作品をその後も2つ書いた。“Heraclitean Fire” のみごとな作品も不滅の “Faith” に達したことの結果を意味してはいなかった。観念的な題材と粹をこらした詩の技巧は、むしろ完成された芸術品の輝きを放つ。詩の世界を美しく結晶させる行為の中に、あるいはホプキンズは自己の生の支えを見出したのかも知れなかった。

生前最後の作品 *To R. B.* は死の6週間前に書かれたが、そこにはすでに詩人の生の力の衰えが感じられた。

Sweet fire the sire of muse, my soul needs this;
I want the one repture of an inspiration.

(妙なる火、詩神の父、わたしの魂はそれを必要とする。わたしには靈感の歓喜がなければならない。)

ホプキンズはその最後の作品で詩を生む強い火だね、喜

びの炎をこい願った。芸術に精魂を込めることが自我の“inscape”を守る最後の砦とホプキンスは無意識に感じていたのかも知れない。ホプキンスは生前にほとんど読者を得ず、死後数十年にして不朽の名声を得るに至ったとはいえ、詩あるいは芸術が作るという人間の主体的な行為に発する限りは、それはつまるところ地上的、人間的な世界を旨ざしたものであって、宇宙の永遠の世界を旨ざしたものではないのである。ホプキンスに授けられた非凡な知覚は、この詩人に豊饒な感覚を躍動させると同時に、強堅な信条の安定を求めさせた。ホプキンスの

“inscape”に表裏一体をなしたこれらの性向は互いに引き合い、反ばつし合い、らせん階段を昇るように少しずつその衝撃的な力を高めた。しかしその一生を通して、感覚的・現世的な個我が、キリスト教信仰によって埋没させられてしまうことは遂になかった。文学の世界で個が最終的に消え去ることはあり得ないからに違いない。ホプキンスが臨終の床で最後に口にした言葉は“I am so happy, I am so happy.”であったという。終油の秘蹟を終えた非文学の世界において、はじめてホプキンスは神の胸に永遠に救われたのではなかったか。